
銀河戦隊メテオレンジャー

元気丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河戦隊メテオレンジャー

【Nコード】

N7683P

【作者名】

元気丸

【あらすじ】

ここは我々の住んでいる宇宙とはまた別の宇宙の物語。

宇宙警備組織《銀河連邦》から、地球を調査するために派遣された調査団は地球に訪れる際に冥王プルートに襲撃された。

地球に降り立った隊長ダンは一人的勇敢な若者《赤星勇哉》に力を与えた。

勇哉は残りの4人の隊員と力を合わせてメテオレンジャーとなり、冥王プルート率いる《ダークマター》と戦うのだ！

story 1 『地球調査』（前書き）

まだこの話にはメテオレンジャーは出ません。

ざっとキャラクター解説です。

ダン＝隊長でしつかり者、みんなの頼れる隊長。 火星人

カイ＝冷静でメカなどの機械類に強い。 水星人

ラン＝調査団の紅一点。 かわいくみんなを盛り上げる、強い心の持ち主。 金星人

レイ＝テンションが高いお調子者。 ダンスなどのスピーディな動きが得意。 木星人

ゴウ＝ものすごい怪力の持ち主。 その外見とは裏腹に動物や花、読書が好き。 土星人

story 1 『地球調査』

ここは我々が住んでいる宇宙とはまた別の宇宙。

この世界には水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星があり、それぞれ太陽から均等の距離にあった。

それがこの世界の太陽系である。

太陽系の惑星はそれぞれ生物が住んでおり、人間がいた。

彼らは他の星と関わりを持ち、《銀河連邦》を作った。

銀河連邦とは銀河の平和を守るために作られた組織である。

しかし、他の星は地球とは関わりが一切なかった。

そこで銀河連邦は地球へ調査団を向かわせた。

調査団は火星、水星、金星、木星、土星から一人ずつ若者が派遣された。

名前はダン、カイ、ラン、レイ、ゴウ。

5人は宇宙船スヘーダーに乗り、地球へと旅立った。

「スーパー・システム室」

システム室にはレイとカイがいた。

「カイ、あとのくらいで地球につく？」

「あと5時間だ」

「長っ！！！！」

「我慢しろ」

「やだ~~~~~！」

「うるさいなあ」

カイがふとコクピットを見た瞬間レーダーにすさまじいエネルギー反応が移っていた。

「どうしたのカイ？」

「こっこれはっ！」

カイはマイクに向かってアナウンスを始めた。

「みんな！今すぐシステム室へ来てくれ！」

残りの3人がシステム室へやって来た。

「どうしたのカイ？」

ランが尋ねた。

「今モニターに映す」

カイがコクピットを操作すると正面の巨大なモニターにレーダー反応とその映像が映し出された。

「これは・・・宇宙船？」

映像に映っていたのは超巨大な宇宙船だった。

「何なんだコレ？」

「書物で読んだことがある」

ゴウが話したす

「あれは、天王星最強と言われた^{キャリバン}宇宙船だ！」

銀河連邦の核兵器は主に天王星が作っている。
その最高傑作と言われたのが、キャリバンだ。

「なんでそのキャリバンがここにいる訳？」
ランが首をかしげる。

「ダン隊長、何か指令を！」

ダンは指令を出す。

「あの船と連絡は取れないのか？」

「やってみます」

カイは再びコクピットを捜査した。

「隊長！連絡が取れました」

「よし、モニターへ映せ！」

巨大なモニターに異星人の姿が映し出された。

「何だこいつ？」

異星人が喋りだした。

《我々に何か用か？》

ダンが問う。

「何故お前はキャリバンに乗っている？」

《お前らに知る必要はない》

「何故だ！銀河連邦に連絡するぞ！」

《理由は、お前らはここで死ぬからだ！》

「何？お前、名前は？」

《死ぬ前に教えてやろう、我が名は・・・冥王ブルート！》

「冥王だと？」

《まあいい、我々の邪魔だ消えてもらおう》

「ばかな、宇宙で銀河連邦の許可なしに攻撃はできない」

《言っただな？よし、見せてやる！》

そして映像化途切れ、キャリバンの映像に移り変わった。

そして突如キャリバンの大砲にエネルギーが集中し始めた。

「おいおい、マジで打つのかよ！」

ダン是指揮をとる。

「みんな、一人ずつメテオブレスを一個持て！」

全員メテオブレスを腕にはめた。

「つけたら脱出ポッドに乗れ！」

そして5つある人間サイズのポッドに乗り込んだ。

キャリバンがビームを打ってくる瞬間に、全てのポッドがスpeerダ

ーから放たれた。

その後、スペーダーは爆発した。

5つのポッドは大気圏で燃え尽きたが5人は燃え尽きず、地球に落下した。

くキャリバン内く

「調査団は撃破した・・・さて、次は地球を侵略するか・・・フハハハハハハハ！」

キャリバン内にプルトの笑い声が鳴り響いた。

story 1 『地球調査』（後書き）

次回『銀河戦隊メテオレンジャー』

「何だあいつは？」

「危ない！」

「君に力を与えよう」

「ダン隊長！」

「みんな、メテオチェンジだ！」

次回STORY 2 『銀河戦隊』

story 2 『銀河戦隊』

「
」

公園の道を一人の青年が歩いている。

「!?」

青年はふと草むらに何かを見つけた。

「これはっ!」

そこに倒れていたのはボロボロになった銀河連邦調査団隊長ダントだ。

「おい、大丈夫か!しっかりしろ、おっさん!」

青年はダンを揺さぶった。

「街のどこか」

「こちらカイ、そっちはどうだ?」

カイはメテオブレスを使い、仲間呼びかける。

「こちらゴウ、隊長の反応はない」

「こちらラン、こっちもないよ」

「こちらレイ、僕のともいない」

「分かった、引き続き調査を続けてくれ」

レイは言う。

「コレだけ探していないんじゃない、やっぱり隊長は……」

「馬鹿なこと言うな！余計なこと言っでないで、隊長を探せ！」

カイはメテオブレスの通信を切った。

「青年の家」

ダンは目を覚ました。

するとそこは、普通の一軒家だった。

「ここは???」

ダンは起き上がろうとした。

「あ~~~~~まってまって!」

青年が掛けてきた。

「まだ起きちゃだめだって《おっさん》」

「・・・おっさん?」

「あんたが公園に倒れているのを見て俺が助けたんだから」

「すまない・・・あと《おっさん》はやめてくれ、俺はまだ25だ」

「25!!!!!!」

「そんなに驚くことないだろ」

「だってヒゲ生やしてるから」

「火星人は10代前半からヒゲが伸び始めるんだ」

「へえ、つて火星人！！！！！」

「おつといけない、口が滑ったようだ」

「おっさん宇宙人な訳？」

「こんなことをしている暇じゃない、早く仲間を探さなくては！」

ダン は 立ち上がり、家から出てった。

「おい、待てよおっさん！」

「街」

「待ってくれよおっさん！」

「仲間が待つてる・・・探さなくては！」

「街・カイ」

カイはレーダーにダンの生体反応があるに気付いた。

「みんな、ポイントA-23に集まってくれ！」

く街く

「「「隊長！」「」」

ダンと青年のもとに4人が集まった。

「なんだ、あんたたち？」

「おう！カイ、ラン、レイ、ゴウ！全員いるな！」

「探しましたよ、隊長！」

青年をよそに感動の再会が続く。

「おい、勝手に話を進めるな！」

「何だお前？」

「隊長、なんですあいつ？」

ダンが答える。

「彼は私の命を救ってくれた」

「どうでもいいけど、我々にこれ以上かわらない方がいい」

「なに？」

ドオオオオオオオオオオオオオオ

突然街で爆発が起きた。

「「「「「「「「「「「「「「「「」

「何だ？」

「隊長！」

「ああ、おそらくプルトの仕業だ」

「どうします隊長？」

「みんな、行くぞ！」

「「「「「了解！」「」「」

5人は現場へ走り出した。

「ちよつ、俺も連れてけ！」

青年も追いかけた。

く爆発現場く

「フハハハハ！」

そこには異星人が立っていた。

「おい、お前！」

「？」

5人が駆けつけた。

ダンが話す。

「お前、プルトの手下か！」

異星人が答えた。

「その通り！俺はブルート様の手下、エウロパだ！」

「みんな、行くぞ！」

「『『『『メテオチェンジ！』『』『』』」

5人はメテオブレスにナンバーを入力し、ボタンを押した。

『メテオチェンジ』

5人をそれぞれの色のスーツが包み、5人はメテオレンジャーへと姿を変えた。

「なんだ、あれは？」

陰から見ていた青年は驚いた。

「調査団が、死んだと思っていたのにな！」

エウロパはビームをダンに当てた。

「ぐおおおお！」

ダンの変身が解けた。

「」「」「隊長！」「」「」

4人はダンの元に駆け寄った。

「大丈夫ですか？隊長！」

「くっ、まだケガが治っていないようだ・・・俺はいいから早くエウロパを！」

「了解！みんな行くぞ！」

「おっしゃー！」

「隊長によくも！」

「絶対倒してやる！」

4人はエウロパに向かって行った。

そのすきに青年はダンの元へ駆け寄った。

「大丈夫か！おっさん！」

「ああ、大丈夫だ」

「ケガ人にこんなことするなんて、絶対ゆるさねえ！」

ダンは思った。

《この青年は素晴らしい。人への優しさ、燃えたぎる闘志、人を守るという心。》

「おい君！」

「なんだおっさん？」

「君、名前は？」

「せきぼし ゆうや
赤星勇哉だ」

「よし勇哉、君にはメテオレンジャーになってもらう」

「は？」

「君はこれから冥王プルートと戦うのだ」

「何それ？面白そう！」

「そう言つと思つた」

そう言つてダンはメテオブレスを外し、勇哉に渡した。

「これは？」

「それはメテオレンジャーへとなるための物だ！」

「なるほど」

そしてダンは勇哉に力を与えた。

「何これ？」

勇哉の体が光り始めた。

「それで君はメテオレンジャーになれる、いつてこい！」

「分かった！行ってくるぜ、おっさん！」

《私はあの勇哉という青年に全てを賭けた、あの青年ならやってくれるはずだ》

「」「」「うあああああ！」「」「」

エウロパの攻撃に4人は倒れ、変身が解けた。

「何故勝てないんだ！」

「5人そろってないからだ、5人そろえば力が発揮される」

「5人目がここにいるぜ」

倒れている4人の前に勇哉が立っていた。

「お前は？」

「まだついてきてたのか」

「早く帰れ！」

「そうはいかない、これはお前らの隊長からの命令だ！」

「」「」「何？」「」「」

「よく分からないが、隊長のことだきつと考えがあるのだろう」

「そういうこと！よし、みんな行くぞ！」

「」「」「おっ！」「」「」

5人はメテオブレスにナンバーを入力し、ボタンを押した。

「『メテオチェンジ！』」

『メテオチェンジ』

5人はメテオレンジャーへと姿を変えた。

「赤き火星の魂、マーズレッド！」

「青き水星の魂、マーキュリーブルー！」

「黄色の金星の魂、ヴィーナスイエロー！」

「緑の木星の魂、ジュピターグリーン！」

「黒き土星の魂、サタンブラック！」

「銀河に勝利しその輝き！銀河戦隊！」

「『メテオレンジャー！』」

5人の背後に5色の爆発が起こった。

「何度来ようが同じだ！」

エウロパの背後から戦闘員^{エリス}が大量に現れた。

「行くぞ！」

5人はエリスに立ち向かった。

「しかし、この数は厄介だな」

5人全員メテオブレスにナンバーを入力した。

『マーズソード』

『マーキュリーブラスター』

『ヴィーナスランサー』

『ジュピタートンファア』

『サタンアックス』

5人の手にそれぞれ武器が現れた。

「うおおおおお」

マーキュリーブルーは空を飛びながらブラスターからエネルギー弾を連射した。

「ギギ・・・」

エネルギー弾に当たったエリスは次々と爆発していった。

「はあっ！」

ジュピターグリーンはジュピタートンファーで、素早くエリスたちの溝うちを突いた。

「ギギ・・・」

溝を突かれたエリスは腹を抱えながら爆発した。

「せいやーっ」

ヴィーナスイエローはヴィーナスランサーの先端にエネルギーを溜め振り回した。

「ギギ・・・」

その攻撃をくらったエリスは爆発していった。

「おりゃああああ」

サタンブラックはサタンアックスでエリスを真つ二つにしていった。

「ギギ・・・」

真つ二つにされたエリスは爆発していった。

そしてマーズレッドはマーズソードでエウロパを貫いた。

「はあっ！」

「そんなもの聞かあああ！」

しかしエウロパの装甲が固くまったく効いていない。

「死ねええ！」

エウロパのエネルギー弾でマーズレッドは吹っ飛ばされた。

「ぐあああああ！」

「大丈夫か！」

4人が駆けつけた。

「みんなの力を一つにするんだ！」

「「「「おう！」「」「」

5人はそれぞれの武器を合体させ、大きな武器を完成させた。

「「「「「完成！ギャラクシーカノン！」「」「」

「何？」

「ターゲット！ロックオン！」

標的がエウロパへと向けられた。

「「「「「ギャラクシーインパクト!」「」「」」

「馬鹿なアアアアア!」

エウロパは爆発した。

「ふう、やっと終わった!」

「「「「「よっしゃー!」「」「」」

「これで終わったと思うな!」

ビルから3人の異星人が飛び降りてきた。

「お前らは?」

その中に冥王プルトの姿があった。

「『冥王プルート！』」

「えっ、ダレ？」

「俺の名はカロン」

「我が名はセレス」

「そして私の名は冥王プルート！」

「冥王プルート・・・貴様だけは許さない！」

「まさか生きていたとはなあ、調査団！」

「我々ダークマターの計画は邪魔させないぞ！」

「天王星の様にこの地球も破壊してやる！」

「天王星を破壊しただと？」

「おや？ご存知でなかったかな？」

「おい、カロン！それ以上話す必要はないだろ！」

「おっとすまない、口が滑ってしまった」

「もういい！2人とも帰るぞ！」

ブルートは消えた。

「「あつ、待って下さいよオブルート様ア！」」

セレスとカロンも消えた。

「何なんだあいつら・・・」

「それより隊長は？」

「「「あつ！」「」」

5人はダンの元に駆け寄った。

「おお、5人とも来たか・・・お前らに言っておきたい」

「なんですか、隊長？」

「もう少しで、俺は死ぬ。その前に言っておきたい」

「死ぬだなんて隊長！」

「しっかりしてください！」

ダン は 勇 哉 を 指 差 し て 行 っ た。

「次のマーズレッドは・・・勇哉だ！」

「エッ！俺？」

「隊長！彼は地球人ですよ！」

「大丈夫だ、彼には火星の力を与えておいた」

「隊長！」

ダンの体がどんどん薄くなっていく。

「じゃあな……みんな、勇哉を頼むぞ！」

ダンが光となって消えた。

「隊長おおおおお！」

これが物語の始まりだった。

s t o r y 3 『爆誕！メテオキング！』（前書き）

少しテンポが速いかもしれませんが、
すいません！

story 3 『爆誕！メテオキング！』

「勇哉の家」

「ここが俺の家だ」

勇哉はにこやかに言う。

「なんでお前はそんなに元気なんだ？」

カイは驚く。

「お前のせいでだ」

「？」

「お前のせいで、隊長は死んだんだ——！！」

カイは勇哉に殴りかかろうとした。

「やめろ！」

そのこぶしをゴウが掴み、止めた。

「隊長が死んだのはこいつのせいじゃない。むしろ隊長を助けてく

れた男だ。冷静なお前がすることじゃないだろ？」

「……それもそうだな、すまない勇哉」

「いいっていいって！これから一緒に闘う仲間なんだから」

「それにしてもフツーの家だなあ、ここ！」

レイが場の空気を乱すかのように喋り始めた。

「しょうがないだろ！俺はフツーの人間なんだから」

「でも本当に普通ね、ここ」

ランも喋り始めた。

「普通のテレビ、普通のタンス、普通のクローゼット、普通の机、それに普通のロボットの人形まで置いてある」

ランたちが見た先には高さ30センチぐらいの丸っこいロボットがいた。

「それ、俺のじゃねえぞ」

「「「ええっ！」「」」

すると、カイのメテオブレスに通信が入った。

「銀河連邦長官からだ！」

「「「何！」「」」

「エッ、ダレ？」

一人だけキョトンとしている勇哉は置いておこう。

《やあみんな、私は銀河連邦長官のフォボスだ》

「「「フォボス長官！！」「」」

メテオブレスのモニターに異星人の姿が映し出される。

《出発時の見送り以来だな。そういえばダンの魂を受け継いだ青年

はどこかな？」

「あーっ、それ俺俺！！」

会話のなかに勇哉が割り込んできた。

《おーっ、君が勇哉君かね》

カイが尋ねる。

「何故ファボス長官がそのことを？」

《ああ、実は調査団隊長のスーツにのみ別の通信気が付いているのだよ》

「そうだったんですか！」

ファボス長官は再び話し始める。

《あと、私からのプレゼントはどうだったかね？》

「プレゼントって？」

《おや？まだ見ていないのか？机の上にワイプ転送したのだが》

「それってあのロボットですか？」

《その通り、彼の名はイオ。彼はダークマターなどの反応を調べる》

勇哉はそのロボットを見つめた。

「へー、こいつがイオか」

『ピコーン！』

ロボットの目が開いた。

「うおっ！」

勇哉はいきなりすることに驚きすぎて、後ろの壁に激突した。

「いてっ！」

『やあ、みんな！僕の名前はイオ！ヨロシク！』

「へー、かわいいじゃん」

「これから、よろしく！」

『ヨロシク!』

イオの目がつこり笑った。

《はっはっ、イオはきっと役に立つかもしれん。よろしくたのむぞ
!》

「長官、ありがとうございます!」

《そうそう、もうすぐ新しいメカも送る予定だ。それも使ってくれ。
それじゃあ通信を切るぞ!》

『ピッ
』

通信が切れた。

『みんな、早速だけどダークマターの反応だよ!』

「いきなりかよ!」

「イオ、場所は?」

『ポイントR - 45だよ!』

「よし、行くぞ！」

「「「「おう！」「」「」

） R - 45 ）

そこには、両手に剣を持った異星人とエリスがいた。

「はっはー！地球のすべてを切り裂いてやる！」

異星人は剣を振り回し、その斬撃でビルや森林を切り裂いて爆破していた。

「待てっ！」

そこに5人が駆けつけた。

「何だ貴様ら？」

「みんな、メテオチェンジだ！」

5人はメテオブレスにナンバーを入力し

「『『『『メテオチェンジ!』』』』」

『メテオチェンジ』

掛け声とともに中央のボタンを押し変身した。

「赤き火星の魂、マーズレッド!」

「青き水星の魂、マーキュリーブルー!」

「黄色の金星の魂、ヴィーナスイエロー!」

「緑の木星の魂、ジュピターグリーン!」

「黒き土星の魂、サタンブラック!」

「銀河に勝利しその輝き!銀河戦隊!」

「『『『『メテオレンジャー!』』』』」

5人の背後に5色の爆発が起こった。

「俺の名はロゴス。分かったぞ！貴様ら、調査団だろ！こないだエウロパを倒した」

「それがどうした！」

「プルト様の命令で貴様らを抹殺するように頼まれている、お前から全員かかれええええ！」

エリスたちはメテオレンジャーに襲いかかった。

しかし、その力の差は圧倒的だった。

5人はそれぞれナンバーを入力し、武器を出した。

『マーズソード』

『マーキュリーブラスター』

『ヴィーナスランサー』

『ジュピタートンファア』

『サタンアックス』

「「「「「おりゃあああああ！」」「」「」」

5人はエリスたちを瞬殺した。

「さあ、残るはお前だけだロゴス！」

5人はロゴスの前で構えた。

「死ねええええ！」

ロゴスは2つの剣を合わせて巨大な斬撃を飛ばした。

「「「「「グハアアツ！」」「」「」」

メテオレンジャーはそれをまともにくらった。

「ぐっ・・・」

「くそっ・・・」

「私たちここで負けるの？・・・」

「いや、負けねえ・・・」

「みんな、あいつが弱っている今がチャンスだ！」

「「「「おう！」「」「」

5人は5つの武器を合体させた。

「「「「「完成！ギャラクシーカノン！」「」「」

「馬鹿な！」

マーズレッドは引き金を引いた。

「「「「「ギャラクシーインパクト！」「」「」

ギャラクシーカノンから巨大なエネルギー弾が発射された。

「プルト様アアアアアアアアアア！！！！！」

ロゴスは爆発した。

くキャリバンく

冥王プルートがいた。

「おのれメテオレンジャーめ！ロゴス、お前に力をやろう！」

プルートはコクピットのボタンを押した。

そしてキャリバンの大砲からエネルギーのビームが地球へ発射された。

く地球く

突如空からビームが飛んできて、それをロゴスの死体が浴びた。

するとロゴスが息を吹き返し、巨大化した。

「うおおおおおおー！」

メテオレンジャーは啞然とした。

「おい、あんなのにどうやって勝つんだよ!」

「ムリムリムリムリ!」

ロゴスは好き放題に街を壊していく。

「この方がもつと暴れられるぜ!」

「止めなきゃ!」

「でもどうすれば!」

『みんな——!』

その時イオが飛んできた。

「イオ!」

「つーかお前、飛べたのか?」

イオは5人のまえに降り立った。

『みんな、プレスにこの紙に書いてあるナンバーを入力して！』

勇哉に紙が渡された。

「「「「「？」「」「」」」」

「何これ？」

「とにかく、入力してみよう！」

「それもそうだな」

早速5人はメテオプレスにナンバーを入力した。

『マーズイーグル』

『マーキュリーレオン』

『ヴィーナスジャガー』

『ジュピタードルフィン』

『サタンバッファロー』

『『『『『サモン・メテオマシン』』』』』

すると、5人の前に5体の機械できた動物たちがワープ転送されてきた。

「イオ、何これ？」

『長官が言ってたもう一つのプレゼントだよ！早くマシンに乗って！』

「よく分からねえけど、行くぜ！みんな！」

5人はマシンに乗り込んだ。

「！？」

巨大ロゴスはその存在に気付いた。

「何だあれは！」

「おお！何かすげえ！」

マーズレッドはその乗り心地にテンションが上がっている。

「おい勇哉、やってる場合か！早く肩を付けるぞ！」

「そうだったな、イーグルミサイル発射！」

マーズイーグルから小型ミサイルが連射発射された。

「ぐおおおっ！」

「俺達も行くぜ、カイ！」

「おう！レオンファング！」

マークユリーレオンはロゴスに噛みつき、サタンバッファローの方に投げた。

「今だ！ゴウ！」

「おっしやー！バッファロードリル！」

投げ飛ばされたロゴスにサタンバッファローの回転した角がぶち当たった。

「ぐおおおお！」

「次は私達よ、レイ！」

「イエイ！」

「まず私から、ジャガーアタック！」

ロゴスにヴィーナスジャガーが体当たりした。

「ぐっ！」

「次は僕だ、ドルフィンキック！」

次にジュピタードルフィンの尾びれでロゴスを引つ叩いた。

「ぐはっ！」

「ラストは俺だ！イーグルダイブ！」

マーズイーグルは赤い光をまとい、ロゴスに突撃した。

「ぐはあああああ！」

ロゴスは倒れた。

「おのれ・・・よくも俺を傷つけてくれたな！」

ロゴスは剣から斬撃を飛ばした。

「「「「「ぐはああああああっ」「」「」「」

5体のメテオマシンは負傷した。

「みんな！プレスにナンバー555を入力して！」

ビルの屋上から必死にイオが叫んだ。

「「「「「分かった！」「」「」「」

5人はメテオプレスにナンバーを入力した。

『フュージョン・メテオキング』

5体のメテオマシンは合体した。

サタンバッファローは足に、ジュピタードルフィンとヴィーナスジヤガーは腕に、マーキュリーレオンは胴体に、メテオイーグルは顔になった。

そこには巨大なロボットが誕生していた。

「「「「メテオキング！爆誕！」「」「」」」

『それがみんなの心が一つになった時完成する銀河の王、メテオキングだ！』

再びイオが叫ぶ。

「なんだあ？今度は巨大になりやがって！死ねえ！」

ロゴスは再び斬撃を飛ばした。

「「「「メテオソード！」「」「」」」

メテオキングはメテオソードを出現させ、斬撃を弾いた。

「何っ！」

「行くぜ、必殺技！」

5人はメテオブレスにナンバーを入力した。

『メテオブレイク』

「「「「メテオブレイク！」「「「「

メテオキングはメテオソードでロゴスを切り裂いた。

「グオオオオオオオ！」

ロゴスは爆死した。

「今度こそ、やったのか？」

「ああ、回復する気配がない」

「やった——！」

「よっしゃ——！」

「おっしや——！」

5人は喜びを現した。

「勇哉の家」

「「「「「ただいま」」」」」

5人が帰って来た。

「「「「「.....」」」」」

それと同時に沈黙した。

『お帰りー！どうしたのみんな？』

イオはとぼけた。

そこには勇哉の家ではない、特撮ドラマなどのよくあるメカメカしい秘密基地が広がっていた。

「イオ、どつたのこれ？」

『僕が改造したの』

「おれの家がああああああ！」

「大丈夫、これはテーブルの上のボタンを押すと元に戻るから」

『ポチッ』

イオはボタンを押した。

ガッシャンガッシャン

基地は見事に変形し、元の勇哉の家に戻った。

『ね？』

俺は勇哉、今ものすごい奴が仲間になった。

story 4 『ゴウの思い』

勇哉とゴウは街を散歩していた。

「地球というのは面白い。都会の部分がありながらも自然が残っている」

「そういえばそうだな、土星はどうなんだ？」

「土星は科学が発達していて、自然などほとんど無い」

「・・・そうか」

2人は公園のベンチに座った。

「だからこの地球がうらやましくてなあ、地球についてもっと知りたい」

「だったら家にある本をやるよ！」

「ホントか！」

「昔親父にもらったんだけど全く読まないで捨てようか悩んでたんだ」

「ありがとな」

「よし！スーパーにでも行って食いもん買つか！」

「スーパー？なんだ、スーパーって？《超》って意味か？」

「違う違う」

勇哉は首を横に振った。

「スーパーってのは食い物とか売ってるところだ」

「そうなのか」

「土星は無いのか？」

「いや、土星は配給制だったからな」

「へへ、っじゃ行くか！」

「おう」

「スーパーマーケット」

『ムシャムシャ』

そこには体の大きく太った男がいた。

「おへ、コレうまっ！」

男は店員の胸ぐらをつかみ店の調理場へ投げた。

「まったく、俺の食事の邪魔してんじゃねえよ！」

男は立ち上がり、店の外へ出た。

店員の一人が叫んだ。

「おい、警察を呼べ！」

（数分後）

パトカーが何台も来た。そして警察が銃を構えた。

「動くな、撃つぞ！」

「ん？何だデメエら」

ちょうどそこに、勇哉とゴウがやって来た。

「なんだあれ？」

「万引きか？」

警官は銃を発砲した。

「何だこれ？」

男は銃弾を口の中に入れた。

「全然うまくねえ、ペツ！」

そして銃弾をはきだした。

「今度はお返しだ！」

男の体から炎が吹き荒れ燃え上がった。

「おい、ゴウ！」

「ああ、あれは人間技じゃない……ダークマターだ！」

男の炎がやむと男の姿は異星人となっていた。

「死ねええええええええええ！！」

異星人は口から炎を吐き、あたりを火の海にした。

警察や、見物客は逃げ出した。

「よし、行くかゴウ！」

「おう！」

2人は異星人の前に飛び出した。

「ん？何だデメエら！」

「お前は、カロン！」

「ぶっ倒してやる！」

「『メテオチェンジ！』」

『メテオチェンジ』

2人はそれぞれ変身した。

「勇哉の家」

イオが叫んだ。

「みんな、ダークマター反応だ！もうすでに勇哉とゴウが戦ってるよ！」

「よし、行くぞ！」

くスーパー周辺く

「マーズソード！」

「サタンアックス！」

『マーズソード』

『サタンアックス』

2人は武器を召還した。

「はあっ」

「たあっ」

「きくかああああああ！」

カロンは2人の攻撃を大量の炎で防いだ。

「ぐああああああ！」

2人は吹き飛び周辺の草木が燃えた。

「勇哉、ゴウ！」

カイ、ラン、レイが駆けつけた。

「『メテオチェンジ』」

『メテオチェンジ』

3人はそれぞれ変身した。

「赤き火星の魂、マーズレッド！」

「青き水星の魂、マーキュリーブルー！」

「黄色の金星の魂、ヴィーナスイエロー！」

「緑の木星の魂、ジュピターグリーン！」

「黒き土星の魂、サタンブラック！」

「銀河に勝利しその輝き、銀河戦隊！」

「『メテオレンジャー』」

「くっ、全員そろったか・・・行け、タルヴォス！」

空からタルヴオスが降りて来た。

「フッフッフ、お任せ下さいカロン様」

「頼んだぞ」

そういつてカロンは炎に包まれ消えた。

「お前ら全員ぶっ壊してやる！」

タルヴオスは両手から炎を玉を放出した。

「はあっ」

炎の球は辺りの草木を全て燃やした。

「ハッハー！」

ゴウは怒った。

「お前、よくも植物を！」

「はあ？何言つてんだお前？」

タルヴオスはそれを嘲笑った。

「お前だけは絶対に許さない！」

サタンブラックはメテオブレスにナンバーを入力した。

『サタンクラッシュ』

「サタンクラッシュ！」

サタンアックスにエネルギーがたまり、タルヴオスを切り裂いた。

「ぐああああああ」

タルヴオスはその場に倒れた。

「今だ！」

5人は武器を合体させた。

「「「「完成！ギヤラクシーカノン！」「「「「

「ターゲット、ロックオン！」

マーズレッドは引き金を引いた。

「「「「ギヤラクシーインパクト！」「「「「

「うおおおおおお、カロン様ア！」

タルヴオスは爆死した。

「キャリバン内」

プルートは指示した。

「エナジー砲、発射！」

すると、キャリバンの大砲からエネルギーの塊が発射された。

「地球」

タルヴオスの体にエネルギーが降り注いだ。

「ぐおおおおおお！」

タルヴオスは巨大化した。

「よし、メテオマシンだ！」

「」「」「」
「おっ」「」「」

5人はナンバーを押した。

『マーズイーグル』

『マーキュリーレオン』

『ヴィーナスジャガー』

『ジュピタードルフィン』

『サタンバッファロー』

5人はマシンに乗り込んだ。

「「「「銀河合体！」「」「」」」

『フュージョン、メテオキング』

5体のマシンは合体し、メテオキングとなった。

「「「「メテオキング！爆誕！」「」「」」」

「死ねええええええ！」

タルヴオスは炎を吐いた。

「『『『『メテオソード&シールド!』『』『』」

メテオキングの手にメテオソードとメテオシールドが現れた。

その炎をメテオシールドで防いだ。

「何い？」

「『『『『メテオブレイク!』『』『』」

「ぐおおおおお!」

タルヴオスは爆発した。

それをビルの屋上から見ている青年がいた。

「へー、あれがメテオレンジャーか」

青年は時計を見て驚いた。

「おっと、バイトの時間か」

青年は受話器の様な物を取り出し、それに向かって叫んだ。

「ネプチューンフライヤー！」

ピピッと音がしたと思ったら青年の前にサーフボードの様な物が飛んできた。

「さて、スーパーまで一っ飛びだ！」

青年はサーフボードに乗り、飛んで行った。

story 5 『レイの修行』

「みんな、いくぞ！」

「」「」「おう！」」「」

「」「」「メテオチェンジ！」」「」

『メテオチェンジ』

勇哉たちはメテオレンジャーへと姿を変えた。

「5分前・勇哉の家」

『みんな、ダークマター反応だよ！』

とイオが叫ぶ。

『つても、動きが素早すぎてセンサーが付いて行かないよ』

「センサーに動かないってどんだけ早いのよ？」

「よしっ、いくぞっ！」

勇哉たちは現場に向かった。

「現在」

メテオレンジャーの前にはまるで忍者のような姿をした異星人がいた。

「ふんっ、貴様らが調査団か」

「だったらどうした！」

「「「「「はっ」「」「」」」」

5人はそれぞれ武器を持ち、大量のエリスに立ち向かった。

「僕に任せて」

ジュピターグリーンはジュピタートンファアを構えた。

「マッハスマッシュ！」

ジュピターグリーンは目にもとまらぬ速さで大量のエリスをすべて片づけた。

「ギギーー！！！！」

エリスが死に、たくさんの爆発が起こった。

残りの4人がジュピターグリーンのもとに駆け寄った。

「ナイス、レイ！」

「お前、いつの間にこんな技を？」

「すごいな」

「よっしゃーっ、残りはお前だけだ！」

マーズレッドの視線の先には異星人がいた。

「我が名はスコル、その緑色のお前！」

「おっ俺？」

ジュピターグリーンは自分のことを指差した。

「そうだそこのお前だ！我と素早さ勝負しろ」

マーズレッドが割り込んできた。

「おいおい、お前さっきの見てなかったの？あの速さに勝てるものなんてあるわけないじゃん」

スコルは答えた。

「赤いのに聞いていない」

「ムキーツ、色で呼ばれると腹が立つ！レイ、さっさとやってやれ

「！」

「解ってるさ、その勝負のつた！」

「どこからでもかかってこい！」

「その言葉、後で公開するなよ！マツハスマツシュ！」

「宇宙忍術、ハイスピード最速移動！」

2人は目にも止まらない速さの世界に入って行った。

「はあっ！」

ジュピターグリーンはジュピタートンファーで攻撃を仕掛けた。

「甘いわぁ！」

しかしスコルはその攻撃を受け止めた。

「宇宙忍術、ファイヤーショット火炎の術！」

「なっ、ぐわっ！」

ジュピターグリーンを無数の火炎が襲った。

「ぐはっ！」

最終的にジュピターグリーンが負け、彼は超高速から抜けた。

「まだまだだな」

そこをスコルが容赦なく襲っていく。

「終わりだあっ！」

ジュピターグリーンにスコルがとどめを刺そうとした時だった。

《何をしている！貴様の任務は調査団抹殺ではないはずだ！》

スコルの動きが止まった。

「すみません、プルート様。すぐに戻ります」

スコルは風と共に消えた。

「何だっ たんだ？」

「ああっ」

レイは倒れた。

「レイ！」

5人がレイの側に駆け寄った。

〈勇哉の家〉

「うつ」

「駄目だよ動いちゃ」

ソファにレイが座りそれをランが消毒していた。
カイが口を開く。

「しかし、レイのスピードを超えるやつがいるとはな」

「何でレイはそんなに早く動けんだ？」

勇哉の質問にレイが答える。

「僕の住んでた木星は地球の3倍の重力なんだ。だから地球では身軽に動ける」

「なるほど」

ゴウがさらに聞く。

「それにしても流石にあれは速すぎないか？」

「もともと木星で、速く動ける修行をしてたんだ。銀河連邦での俺の先輩、天王星人のクレシダさんと一緒に」

「天王星人？」

「ああ、天王星はもう無い。恐らくクレシダさんもいないだろう」

部屋全体にしんみりした空気が漂った。

「そうとなれば早速修行だ！」

（数時間後）

レイはジュピターグリーンの姿で変形した勇哉の部屋で修行をしていた。

「よしっ、イオ！重力を5倍にしてくれ」

『こっ5倍？ほんとにいいの？』

「ああ」

『じゃあ、行くよ！重力切り替え、グラビティ5《ファイブ》！』

イオはボタンを押した。

「クッ」

ジュピターグリーンは必死に重力の絶えている。

「う、うおおおおお！マッハスマッシュ！」

しかし体がついて行かなかった。

「ぐはっ」

ジュピターグリーンはその場に倒れた。

「レイ!」

外で見ていた勇哉たちがすぐさま駆け寄った。

「無茶だ、こんなの」

「俺は負けねえって言ってロゴスに致命傷を与えたのは誰だっけ？」

それはstory3での出来事だった。

「だから僕は絶対にあいつに負けない。そのために修行するんだ!」
するとジューピターグリーンは立ち上がった。

「よしっイオ!もう一回だ!」

「次の日」

「この間は爆弾を仕掛ける任務を忘れてしまっていた。不覚だった」

スコルは廃墟で爆弾を仕掛けていた。

「そこまでだ」

そこにはレイを中心にメンバーがそろっていた。

「みんな、行くよ!」

「『メテオチェンジ』」

『メテオチェンジ』

5人はメテオレンジャーへと姿を変えた。

「緑の木星の魂、ジュピターグリーン！」

「赤き火星の魂、マーズレッド！」

「青き水星の魂、マーキュリーブルー！」

「黄色の金星の魂、ヴィーナスイエロー！」

「黒き土星の魂、サタンブラック！」

「銀河に勝利しその輝き！銀河戦隊！」

「『メテオレンジャー！』」

5人の背後で5食の爆発が起こった。

「うぬ、やれ！」

大量のエリスがメテオレンジャーに襲い掛かった。

「お前の相手は僕だああっ！」

スコルの前にジュピターグリーンが現れた。

「懲りないやつだ、^{ハイスピード}最速移動！」

「マッハスマツシュ！」

2人は超高速の世界に入った。

「はあっ！」

スコルが攻撃を仕掛けた。

「へっ！」

ジュピターグリーンは再び加速し始めた。

「馬鹿な、これ以上加速するといつか！」

「ハイマックススマツシュ！」

そしてスコルに打撃を加えた。

「くっ」

「行くよ！」

ジュピターグリーンはメテオブレスにナンバーを入力した。

「ジュピタークラッシュ！」

『ジュピタークラッシュ』

スコルはジュピタークラッシュを受け、2人は超高速の世界から抜けた。

「おのれ」

「やったなレイ！」

「おう！ギャラクシーカノンだ！」

5人は5つの武器を合体させた。

「「「「完成！ギャラクシーカノン！」「「「「

そしてマーズレッドが引き金を引いた。

「「「「ギャラクシーインパクト！」「「「「

「馬鹿な、この我がああああ！」

スコルは爆死した。

「キャリバン内」

「スコルよ、再び蘇れ！」

プルートはコクピットのボタンを押した。

するとキャリバンからエネルギーが発射された。

「地球」

スコルの死骸にエネルギーが降り注いだ。

「うおおおおお！」

スコルが巨大化した。

そこにレイのメテオブレスにイオから通信が入った。

《レイ！君に銀河連邦からプレゼントだって！》

「えっ、マジ！」

するとメテオブレスのいくつかのボタンが光った。

「これを押せばいいのかな」

ジュピターグリーンは光ったボタンを押した。

『サモン・メテオスティングレイ』

すると空からエイの形をしたメテオマシンが飛来した。

「はっ！」

ジュピターグリーンはそれに飛び乗った。

「俺たちも！」

『マーズイーグル』

『マーキュリーレオン』

『ヴィーナスジャガー』

『サタンバッファロー』

そして4人も飛び乗った。

「『『『『銀河合体！』』』』」

『フュージョン、メテオキング！』

4体のメテオマシンは合体し、本来のジュピタードルフィンの場所にメテオステイングレイが変形、合体した。

「『『『『完成！メテオキングステインガー！』』』』」

「死ねえっ！」

スコルはクナイを振りかざした。

「『『『『はっ』』』』」

しかしメテオステイングレイの尾が刀に変形したステインガーソー

ドで受け止めた。

「何っ！」

「「「「必殺！ポイズンステイング！」「「「「

尾の毒で紫色のオーラの染まったステインガーソードでスコルを突き刺した。

「ぐはあ！」

スコルは爆発した。

それをビルの上で見ている青年がいた。

「へえ、今度は銀河武装か。面白くなってきたじゃないか」

青年はフウツと息をつくとニヤツと笑った。

「ま、俺にはかなわないか」

青年はその場を後にした。

番外編〈ダークマター怪人図鑑!〉

どうも、元気丸です。このコーナーはダークマターの怪人を紹介するコーナーです!

解説に調査団隊長のダンさんをお迎えしております。

「どうも」

それでは早速いってみましょう、ダンさんも一緒に。

「私もですか」

はい。

「なんて言えばいいのですか?」

《メテオチェンジ!》って言ってください。

「解りました」

では一緒に

『『メテオチェンジ!』』

【怪人ファイル1】

登場話：s t o r y 2

名前：エウロパ

身長：205cm（巨大時：52.3m）

体重：179kg（巨大時：447.5t）

《説明》

ダークマター記念すべき最初の刺客。

両腕の巨大な爪や体^{エウロバクロ}にまとった鋼鉄のような鎧^{エウロバアーマー}、そして胸の中心にある紋章から放たれる強力な光線などの武器^{エウロバビーム}を駆使して闘うが、ギラクシーカノンの前に敗れる。

この怪人はダンさんを殺してしまった怪人ですよね。

「はい」

でも所詮ただの怪人でしょ？

「いや、あのときは怪我が治っていなかったんです。だからやられてしまったんです。それともなんですか、あれですか？私が弱いと言いたいんですか？」

いえ、何でもありません。

次行きましょう。

【怪人ファイル2】

登場話：s t o r y 3

名前：ロゴス

身長：199cm（巨大時：49.8m）

体重：149kg（巨大時：327.5t）

《説明》

両手に持った剣で森林や建物を切り裂いていた。
ロゴスセイバー

身にまとっている黒いスーツはある程度の頑丈さと俊敏さを兼ね備え、両手に武器を持っても戦闘に無駄のない動きをすることができる。

劇中ではメテオレンジャーを追いついたものの、マーズレッドのマーズクラッシュで致命傷を浴びて最後は初登場のメテオキングによって倒された。

建物や森林を切り裂いてしまつとはすごいですね。

「そうですね、メテオレンジャーがあのままやられてたら地球は確実に滅ぼされていたでしょう」

しかし勇哉のあきらめない心が奇跡を呼び、マーズクラッシュが発動したのでしょうか。

「やっぱり私の見込んだ青年ですね」

次行ってみましょう。

【怪人ファイル3】

登場話：s t o r y 4

名前：タルヴオス

身長：1 9 8 c m（巨大時：4 7 m）

体重：1 5 4 k g（巨大時：3 8 2 . 5 t）

《説明》

カロン直属の部下で真つ赤な岩のようなフォルムは所々炎が噴き出し、手からは炎の球を出せるようになっている。その炎の球は周りの草木をすべて焼き尽くせるほどの威力がある。

劇中ではその行動がゴウの怒りを買ってサタンクラッシュを喰らってしまった。

また、口からも炎は出せるがメテオキングのメテオシールドで防がれ大した見せ場はなかった。

最後はメテオブレイクで爆死した。

周りの草木が全焼つてすごい威力の炎ですね。

「そうですね、しかしその行動でゴウは怒りサタンクラッシュを喰らったでしょう」

しかしそんな炎もメテオシールドの前では無力ってことですね。

「さすがメテオキングですね」

次行ってみましょう！

【怪人ファイル4】

登場話：s t o r y 5

名前：スコル

身長：201cm（巨大時：50・3m）

体重：151kg（巨大時：377・5t）

《説明》

地球でいう忍者のような恰好をしていて武器はクナイ、宇宙に古代より伝わる宇宙忍術を使う。

そして最大の能力はハイスピードという目にも止まらない速さで移動することができ、最初はジュピターグリーンを圧倒したがハイマックスマッシュとジュピタークラッシュの合体技を受けてジュピターグリーンに敗れる。

巨大戦ではメテオキングスティンガーのポイズンスティングを受け爆死する。

宇宙忍術、興味深いですね。

「はい、他にも宇宙忍術はファイヤーショットというものも使っていました」

火炎の術ですか、本当の忍者みたいですね。

「そしてこの話の見どころはレイのハイマックススマッシュでしょうね」

確かに、それと新しいマシンのメテオスティングレイですね。

「これから新しいマシンを出すんですか？」

はい、出そうと思ってます。

お楽しみに！

以上、元気丸と「ダンでしたー」

番外編へダークマター怪人図鑑!〜(後書き)

こんな感じでやってみました。

たまにはこんなのもいいかな？

番外編はこんな感じでこれからやっていきます。

もし不評だったらやめます。

何かご意見があれば感想に書いてください。

という訳で元気丸でしたー！

story 6 『新しい戦士!?!』

「夜の街」

「「「「「ギャラクシーインパクト!」「」「」」」」」

「ギー!」

早速ギャラクシーインパクトで大量のエリスを粉々にした。

「ふう、終わった終わった!」

「あゝ疲れた」

「ねえ、今日の夕飯は?」

「まだ決まってない」

「じゃ、俺カレーで!」

「今から、買い出し行こうぜ!」

5人は変身を解き、帰ろうとした。

その時、暗闇に染まった空から一筋の光が地上に降り注いだ。

ドオオオオオオオオオオ！！！！

「「「「「！？」」「」「」

5人は光の先へ向かった。

「あれは・・・・宇宙船か？」

「ああ、小型の一人専用機だな」

5人の見る先には小型ジェット機のような宇宙船が墜落していた。

プシュー

間もなく宇宙船のドアが開いた。

「何だ？」

「人か？」

中から、男が出てきた。

「！」

「どうしたレイ」

「シ、シレクダさん！」

中から出てきた男を見た瞬間、レイの脳裏に彼の恩師のシレクダが浮かんだ。
なぜなら、宇宙船に乗ってきた男とシレクダの姿が全く一緒だからだ。

「シレクダさんじゃないですか！どうしてここに？」

「レイ！」

レイはカイの呼び声に答えず、男のそばに駆け寄る。

しかし、男の返答はレイには想像できないものだった。

「誰だお前」

「え？」

「シレクダというのはこの体の名前か？」

何故か男は自分の体を別の体の様にものを言う。

ドパパパパパパッ

突然マシンガンを持った異星人が射撃をしてきた。

「「「「「「!?」」」」」」

「みんな、避ける!」

謎の男も合わせて6人がそれぞれ物陰に隠れた。

「クツ・・・ダークマターか」

「カカカカツ!ダークマターの名銃撃手のダイモスの力を受けて
みろっ!」

するとダイモスは銃を撃ちまくった。

「ダークマターだと?」

男は突然立ち上がりダイモスの前に出てきた。

「何だお前?殺されたいのか!」

「フン、その程度で俺を倒せるかな?」

「何だと?」

「何やってんだアイツ」

それを物陰から勇哉が見ていた。

男は腰の備わっていたカバーから剣を取り出した。

「流星変身！」

男は叫び、剣を振り上げもう一度叫んだ。

「はぁっ！」

すると男を白いスーツが包み、その上から装甲と頭にはマスクが装着され、変身が完了した。

「流星騎士、ウラヌス！」

5人、そしてダイモスの目の前にはメテオレンジャーに類似した白い戦士が立っていた。

「誰だかしらねえが蜂の巣にしてやる！」

ドパパパパパパッ

再びダイモスは連射した。

すると白い戦士は鼻で「フン」と笑い、剣にある装甲の部分をスライドさせて叫んだ。

「シューティングポジション、シールド！」

『シールドスパーク』

ウラヌスの叫びと剣から発せられた音声とともにウラヌスの全身を囲むようなドーム状のシールドが張られた。そしてそのシールドが銃弾の効果を無力化させた。

「何イ！？」

更にウラヌスは2回スライドさせた。

「シューティングポジション、ショット！」

『ショットスパーク』

ウラヌスが持っている剣の剣先からいくつもの斬撃が飛ばされた。

「すべて、撃ち落としてやる」

ダイモスの放った銃弾は斬撃を撃ち落とすはずだった。しかし、その銃弾を避けるように斬撃の軌道が変わり、全ての斬撃がダイモスに当たった。

「グアアアアアッ！」

ダイモスは倒れた。

「トドメだ！」

ウラヌスは剣に赤いカードリッジを装填した。

「流星斬り！」

『ウラヌスクラッシュ』

するとウラヌスは剣を構え、走りながらダイモスを斬った。

「グッ……ハッ！」

ダイモスは爆発した。

「す、すげえ」

「何者なんだアイツは？」

「おいアンタ！」

勇哉はウラヌスのことを呼んだ。

「!？」

ウラヌスは振り返り言った。

「お前等、ダークマターか！」

ウラヌスは勇哉に斬りかかった。

「違う！」

「黙れえええええ！」

「問答無用かよ……メテオチェンジ！」

『メテオチェンジ』

勇哉は変身し、マーズソードでウラヌスの剣を受け止めた。

「クツ……もう時間か」

ウラヌスの変身が解け、その場に倒れた。

「おい、大丈夫かアンタ！」

勇哉も変身を解き、ウラヌスのそばに駆け寄る。

「どうする？」

「連れて帰るか」

5人はウラヌスを連れて帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7683p/>

銀河戦隊メテオレンジャー

2011年10月13日20時50分発行